美術月評

10月

圧倒的な構成の密度 個人史の断層を結ぶ

石田尚志 渦まく光 三島友希

上村豊

全国的にも展覧会シーズンのこの時期、県内各地でさまざまな展示、イベントが活発に行われた。中でも「石田尚志 渦まく光」（9／18～10／25）は、県立美術館の開館以来初めて開かれた、若手現代作家による大規模な個展として注目を集めた。

「ドローイング・アニメーション」という独自の手法による石田の「動く絵」は、美術表現、映像表現といったジャンルや文脈を超えて、多方面から高く評価されている。企画ギャラリーをフルに使い、初期から最新作まで主要作品を網羅した今回の展示も、その充実した広がりと奥行きを示すものであった。

〈フーガの技法〉（2001年）に代表される紙の上の仕事、そして〈部屋／形態〉（1999年）に始まる「現実空間」への仕事、石田作品の二つの系譜に共通するのは、「ドローイング」という本来持続的で「無時間的」ともいえる一連の行為を「瞬間」に微分し、さらに映像として連続的な時間に再構成するというプロセスである。

これらを全て手描きと「コマ撮り」によるアナログ作業で行うわけで、制作に要する時間と作業量の膨大さは想像を絶するものがある。この「描く」ことへの偏執的ともいえる信念と揺るぎない制作態度、そこから生み出される圧倒的な構成の密度こそが、石田作品の核を形作っている。

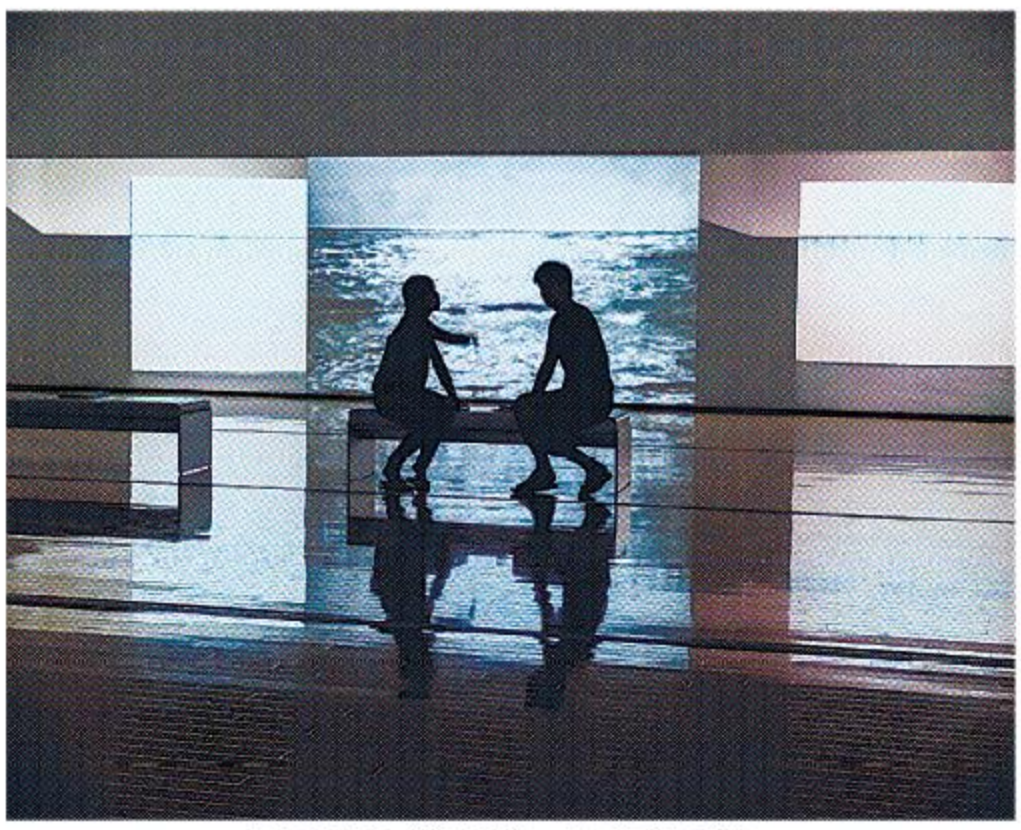
だが一方で作家は「どの作品にも簡単なルールがあるだけです。それは制作の中で自由を保持するために、自由でない状況をあえて一つ作るということ…日々、制作の途上で何かに気づき、発見をして、それをさらに描いていくのです」（作家インタビューより）とも述べ、制作における即興性やドキュメンタリー的な側面を強調する。

この一見矛盾する態度は、入れ子状に重なるいくつものフレームを次々に脱ぎ捨て、無限とも思える増殖を繰り返しながら、どこまで行っても何かにたどり着くことができないという、石田の「動く絵」が抱えるある種の「空虚さ」に通じるものではないだろうか。そして、この過剰と空虚の相克こそ、私たちが石田作品から受け取る、フラストレーションを含んだ特異な詩情の本質なのかもしれない。

一方、展示構成の全体に目を転じると、個々の作品を単に年代順に羅列するのではなく、「絵巻」「音楽」「身体」「部屋と窓」といったテーマを切り口に、原画などの資料展示も盛り込み、創作活動の全体像を多面的に浮かび上がらせようという明確なコンセプトが見られる。そこには作品のパワーを引き出し、観客の想像力を刺激する魅力的な展示空間へと編み直していこうとするキュレイター側の強い意志と意欲も感じられる。アーティストとの粘り強い関係構築の上に初めて実現された企画であろう。今回のキュレイションは、共催の横浜美術館が中心となって行われたが、県立美術館においても今後、本展のような同時代の作家との対等な協働により新たな動きを創り出し、共に成長していけるような、独自の企画が生まれることを願ってやまない。

古書店「言事堂」では、三島友希展「お祖母さんがあたしの服を自分の服にピンで留めたとき」（10／6～16）が開催された。三島は先の震災と原発事故を機に沖縄に移住し、子育てを経て制作を再開、県内では初の個展となる。展示は移住前に制作されたドローイング3点と、沖縄で制作された絵画、彫刻、映像など複数のメディアによる新作7点で構成され、個々の作品に現れる、作者のいわば個人史の断層のようなものを、展覧会タイトルに引用されたドストエフスキーの短編「白夜」の一節を導線として、ひとつの空間に結びつける試みのように感じられた。2人の女性が互いの服を編み合わせる映像とオブジェが対となる〈double think〉（2015年）は、「支配―従属」「自立―依存」といった三島を制作へと駆り立てるモチーフが顕著に表れた中心作である。ただ、新旧10作が個々に示すある種の完結性が、作家が意図した統一的なナラティブを阻害している面も感じられた。

那覇市泊のOCAC（沖縄コンテンポラリーアートセンター）によるシリーズ



石田尚志〈海の壁―生成する庭〉

三島友希〈double think〉

沖縄のまちなか表現 OCAC企画展 若々しい意欲に驚き

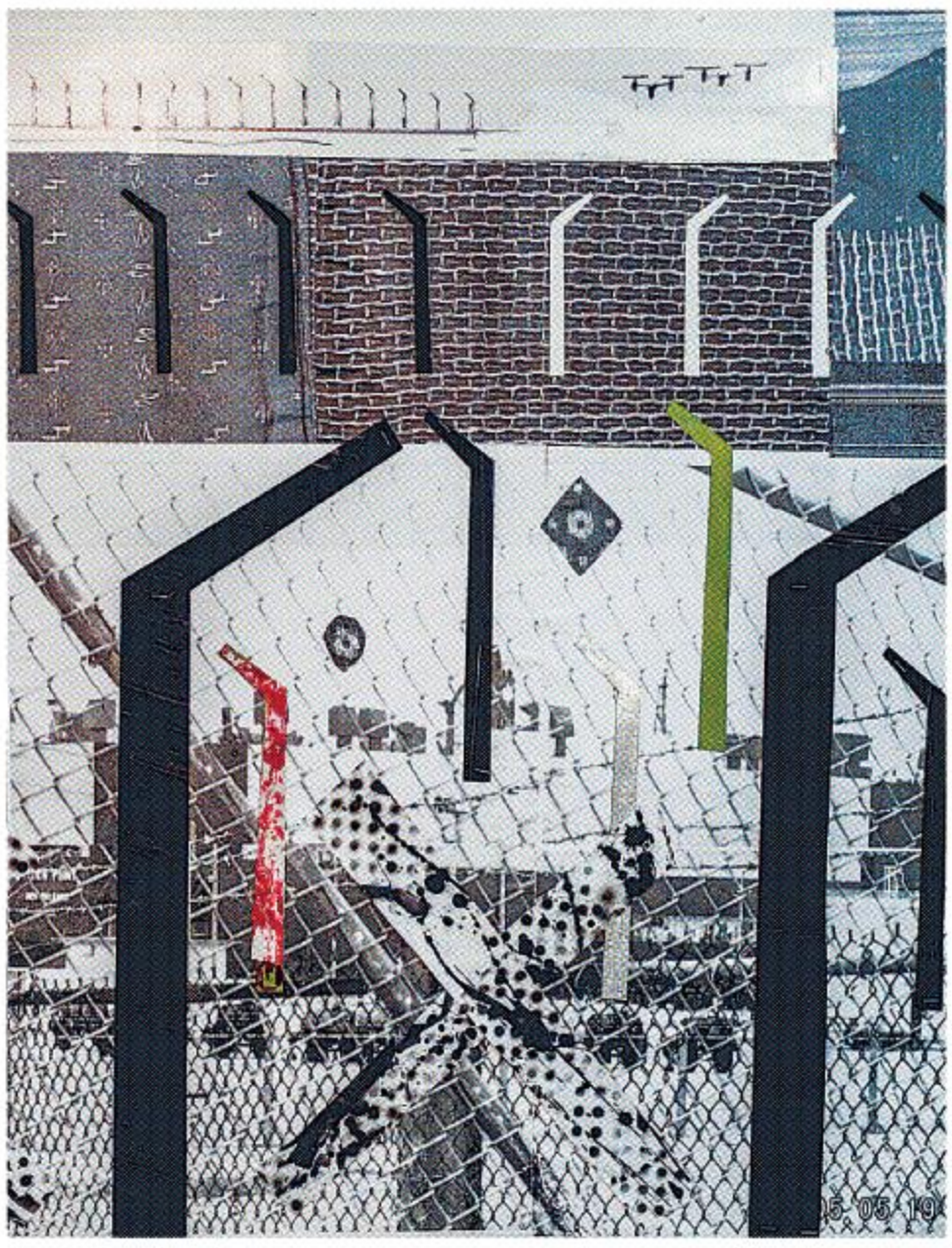
高良憲義

企画「アジアン・コミュニケーション2015」では、沖縄に在住・滞在経験のある台湾と韓国出身の3人のアーティストが、それぞれの視点から、沖縄の「まちなか」に焦点を当てた展示を行った。ただ、筆者が見た金美羅（10／10～18）と黄健樺（10／24～11／1）の展示に限っていえば、作品は概して沖縄に関する表層的、ステロタイプ的な表現にとどまっているように感じられた。企画側のOCACにも、「まち」と「ひと」をつなぐ「プラットフォーム」として、アーティストと地域、双方に対するより緊密な働きかけを期待したい。

最後に短くではあるが、高良憲義の個展（那覇市民ギャラリー、10／6～11）にも触れておきたい。一貫して戦後沖縄の社会状況に対するアクチュアルな制作を続けてきた作家の18回目の個展になるが、その若々しい創作意欲にあらためて驚かされる。「僕は常に『今』に追いつきたいと思って制作を続けている」「僕より能力のある若い人達が、何故今ここで起こっていることに反応しないのか」「ひとつ終わるとすぐに次の作品が作りたくなるので、展示は毎回新作になる」。これらの言葉は、高良の作品に見られるある種のインスタントさ、「拙」とも呼びたくなる味わいが、作家が常に感じている「緊急性」への切実かつしなやかな応答のアクションであることを示すものではないだろうか。

（琉球大学准教授）

金美羅「ICE BREAKERS」展より



高良憲義〈stealされた町・港・文化1〉（部分）